



男は ^{おのれ}己の愚劣さを強く感じていた。

己の武俠としての刀を振るい、刀に生きる……そして人としての想いは決ま
っていて、昔から変わらない筈だった。しかし今現在、己がとっている行動に
対して、納得のいかなさと、同時に後ろめたさを感じずにはられないのだ。
それは彼に、自虐とはまた一段違う克明な自己批判を身に刻んでいた。

(^{おれ}己は自らの誠に悖りながら、その怯懦故に愚かなことをしているのだ……)

それを彼は知っている。

解っていて、分かっていても、それでも、退くことも、拒否することも出来な
い。

ただそれは、逃げることをして、その先の誠に反した己で生きることが、ど
うしようもなく認められないからである。

それは武俠の……^{さが}武刃者の性のカタチだろう。

グチャグチャに腑抜けた背筋や、心の芯が抜けたスガタで、己の弱さを呪い
ながら、死ぬことをしないで尚生きる。その酷薄さを許容できない弱くも、強
い意思。

生きる事——生の欲求を貪るだけの生。

それをかつての武士は、恥を犯して生きる事と考えた。誇りを逸した生は恥
辱なのだ。

^{こんにち}今日の武士に代わる存在であるところの武俠とて、その過去の精神の延長を
持つ。恥辱に満ちた生は、『死していると等しい』 とするところがある。

(そう、己は信念に悖ることをしたのだ)

江戸城を境に東のシマでも、疎地に見える民家がまばらな村。刀郷には二大
家やそれなりの勢力を誇る組から、様々な理由で距離を置きたい人間がいて、
こうした村はずれにぽつんと自家耕作をして暮らしている者がいる。

その立派とはいえない掘立小屋のような民家の戸を叩き、男は腹に鉛のよう
にずしりとくる後ろめたさと鎬を削る。

自分は贖罪をしに来ているのだ。

第二章 太刀の参

己の犯した過ちに対しての、報いを受けに来ているのだ。

(だから、逃げるわけにはいかない)

(せめて、このことだけでも悖らずに、刀を振るおう)

男はそんな風に、己の心の揺らぎと……よぎり、せめぎ合う心の 『弱さ』と戦う。

叩かれた戸が、建て付けが悪そうに不機嫌な音を立てて、重々しく開かる。そして顔を出し応じた人物に、男は頭を垂れる。

現れたのは、年齢以上に老け込んだ肌のがさつきと、傷の様にはっきりとした皺が多く見られる顔をした女だった。

「あんたか……」

女は言う。その美しさとは程遠い声が、男の身と心に不快感と良心の呵責の両方を喚起させる。そして女は続けて言った。

「また斬ってくれたのかい？」

そのどこか悦に浸ったような声は、人から奪った果実を貪り喰って満足しているような下卑た貌からも見て取れたが、男は感情を出さずに答えた。

「……はい、金居荘兵という武俠です。あなたが恨みある、あそこの組傘下の道場で、指導をしていた男です」

項垂れる様子の男の言葉——その姿と斬状の報告を受けて、女は皺のある目を垂れさせ、口を月の輪のようにたゆませる。その様がくしゃくしゃにした顔の皺以上に醜いことを、男は視て確認せず思う。かすれた笑い声が聴こえた。

それはおぞましい笑いだった。

人の不幸を——人の死を聞き、嬉々とする邪悪なモノ。

俠としての仁の心が、その醜悪さを咎めたいという思いを生じさせる男だが、己の立場がそれを許さない。男は拳を握り締め、震わせた。歯を強く噛みしめ、表情も強張っていることを彼は自覚したが、隠せなかった。

隠せないのが、この男の性なのだろう。

隠しとどめをするような心の持ち主ならば、それも然りといった処か。

しかし、ひとしきり醜く笑い、男がそこにいることを今思い出したように視直した女は、彼の怒りに身を震わせる様子を目にし、啖を吐き出すように言う。

第二章 太刀の参

「カツ あんたが何を怒る？ あんたにそんな資格があるのかい？ あたしの倅を殺したあんたが、自分がしていることは心苦しいと憤るのかい？ 良い御身分だねえ」

「.....申し訳ない」

ふん、と息を吐き、顔をことさらしわくちやに歪める。女のその目は、昏い彩で沼の水のようにぬめっている。それは、目の前の自分に許しを乞う男をどう料理してやろうかと、そんな陰湿な情念に突き動かされているのが見えるような、ドブの糞と泥を煮詰めたような目の彩だった。

男は思う。

堅気の青年を誤ってとはいえ己が斬り殺したのは、事実だ。それは揺るぎようがなく、変えようがない、自らが犯した『咎』だ。それを母一人子一人だった青年の母親が、息子を殺され怒り、哀しみ、恨みを持つのは当然だ。その責を己が負うのは甘んじるべき“けじめ”だ。そして、その恨みを晴らす矛先が、自分と彼女が息子を失う切っ掛けとなった『獅士堂』に向かっていたとして、己に何が言えたものか。

「あんたには話したけれどね、倅とあたしは西の.....あのクソメスヤクザが頭のシマで暮らしていた」

女は軒先に歩み出て、秋の夕日を浴び、その光に忌々しそうに目を細めた。夕日の方角は、獅士堂のシマがある。

「あの組は大きいからね。私らの町の田畑も否が応なく刈り入れの一部を納めていたさ。それはこの郷にいたらどこでもかわりやしない。それは許せるってモノさ。ねえ、あんた」

男は俯いて、女の語りに耳を傾けるのみだ。こうした一連の身の上話は、彼女が男に己が過ちと責を迫る執拗な手段であり、この話を聞くのも一度や二度ではなかった。

それを男は、甘んじなければならない、と思っている。

「けれど、今年に入って冬の農閑の時期に、倅は腕に大けがをして担ぎ込まれてきた。真面目に野良仕事をしている倅が、一体何事かと事情を聞けば、獅士堂の組で娘子の木刀で叩き斬られたんだとッ それだけでよけりやまだまだ

第二章 太刀の参

った！ 倅はそれで右腕をごっそり切り落とさなけりやならなくなったッ！
こんな非道い話があるかいッ！ なあ、倅が何をしたってんだい！」

応えられず、男は歯を強く噛むばかりだ。

その事情は詳しくは解らない。案外、組の若い者にけしかけられて、婦女子に悪戯をしようとして返り討ちにあったのかもしれないし、やはり武侠のすること、理不尽に刃を受けたのかもしれない。何故、堅気のあらしこ作男が獅土堂の組員に木刀とはいえ斬りつけられなければならなかったのか、それは男が考えしても詮無い。

女は続けた。口から唾を飛ばして、形相を歪めて西の方角を呪うように叫んだ。

「理不尽ってやつだろう！ 堅気の者の痛みを奴らは何も考えちゃおらんようだよ！ 身勝手に、横暴で、人を傷つける事を何とも思っちゃいない！ だから武侠なんて人殺しの生業を平気でしとるんだッ！」

人の命を何だと思っている。女は言った。

それは武侠である男にとっても、痛烈極まれりだった。

そして女の言葉は、この郷の堅気の声そのモノだった。

刃難が蔓延り、武侠、侠客の間だけでなく、堅気の衆にも刀の煌めきが迫り、裂肉流血を以って命を奪う。その現実への哀しみと怒り。そして武侠への恨みの念。その痛切な実情を、この母親は身と口から発していた。

あの組が憎いよあたしは、と女は言う。

「あんたが倅を斬ったのは、あの子が身持ちを崩して侠客とつるんでいたツケみたいなモノだ。その場に居合わせた者から聞き及んでおるよ、あんたはワザと倅を狙って斬ったんじゃない。あの子は仲間と思っていた侠客に盾にされたんだってね……」

拳を握る手に汗が滲む。

思い出すのはこの母親の息子を、片腕の青年を斬ってしまった時の事。

刀を持たない者だった。

侠客の下っ端のような、チンピラに付き従うような男だった。

しかし目つきや物腰を視れば、青年は人を殺めた事のない堅気の者に間違いなかった。

第二章 太刀の参

揺るぎようもなく、揺るがしようもなく、変えようもなく——堅気の者。

男は、無辜の堅気の人間を斬ってしまったのだ。

この郷の武俠として、あるまじき過ち。

刀郷において、武俠が組の威厳としてよりも、俠としての在り方で慕われ、尊ばれ、畏れられるその所以とは、何よりも堅気を傷つけない俠こそが真の俠気を持った者だと、この郷の歴史がそう堅気に知らしめているからに他ならない。

今に至るまでを振り返ってみても、本当に堅気とうまくやっているシマの武俠は、任俠者は、堅気を決して虐げず、傷つけない。そしてそれこそが、武俠の誇りであり、『気位』の一つ。

苦汁を噛み締める男は、幼い頃から兄弟達と刀技の修練を積み、東のシマの組々の力になって成長していく中で、思っていたのだ。

（己もそんな、俠気ある武俠で在りたいと。願い、貫こうとした……なのに）

なのに、男は堅気の者を斬ってしまったのだ。

それが過失であれ、なんであれ、揺るぎなく、慄然として、変えようがなく、現実に——それは彼を責め立て、苛むのだった。

「だから、あんたは悪くないのさ」

と、女は相手の顔色を窺い、言う。

ちっとも憐れんではない、暗い悦に浸った目で視ながら。

「あんたは悪くない……。けれどね、倅を斬り殺したあんたが、少しでも悪いことをしたと思ってくれるのなら、倅とあたしの無念を晴らしてくれるよねえ。あの組のクサレ武俠共を、一人でも多く斬って、殺しておくれよ。ねえ、あんた」

——男は、己の愚劣を強く感じ、理解している。

それは、この償いは終わりが無いだろう、という事を知るのと同義だ。

東のシマのさる組が、自分の事情を知って助勢を加えてくれている今でも、この女の望みはどこまでいっても満たされることはない。何故なら、いくら頭数が揃っても、あの西の大家、獅士堂の武俠を全て斬る事は出来ないし、そうした意味でもこの女が区切りをつけない限りは、この恨みは果たされない。

果たされないのだ。

第二章 太刀の参

これ以上は、彼女が自らの心に決着をつけないと、彼女の恨みは続き、果てが無い。

だがしかし、終わりが無いわけでもない。

終わりはある。

この女に許しを乞い続ける限り、男の贖いは終わらない。

網膜に映る人を斬る利器——刀。

(もはや、なれば、この女がいなくなれば.....)

それはないのだ。

この男には、これ以上も何も、堅気を斬る己が許せない。今の己は、信念に悖って生きていることは承知している。だが、だからといって、同じ過ちを繰り返して良いことにはならない。一度踏み誤ったからといって、それと同じことを許すのは、勇の心に欠く卑怯者のすることだ。男は侠気ある者の最後のころとして、ぎりぎり しょうがい 崖峭 の淵に留まる。そう思うことで自らを奮い立たせ、今もこうして怨念を募らせ、己に請う女と向き合っているのだ。

ならばそう、この男に逃れる術はないのだろうか。

既に西のシマで大きな組を敵に回し、さらに後ろからこの母親に報仇を迫られ続ける。

この男の決着——終点とは。

「あたしの身を斬られる思いを、あいつらにも少しは味わわせておくれ。.....
じゃあ、また来てくれるのを待っているよ、相馬さん.....」

そう言って、踵を返して家屋に入っていく女を、男は頭をあげ見送る。視界に入る小さな背中。

そして男は、震える手で己の刀に手を添える。左手の親指が鐔に触れる。
襲ね菊。

この菊のような心を、己に重ねよう。

そう、彼はいつかの日に心に誓ったのだ。

項垂れて、震える手を乱暴に薙ぐと、男——相馬二瓏は斜陽に向かって歩き始めた。

それから三日と空かない間だった。

春花の手配で、青刃のシマで活動する情報屋が各々『襲ね菊』の鐔の武俠が現れないかを注視していた。これを同じくして、獅士堂に加わって後に吽形衆のまとめ役の有角とも親交を持っていた左馬ノ介は（同じハタケの匂いで組に来てから何かと接点があったようだ）、彼と連携をしつつ、独自でも『襲ね菊』に加えて『真庭念流』、『マジロウ』という手がかりで闇討ち兇行犯のことを調べていた。

そんな彼らの網に、件の武俠が引っ掛かるのはそう遅くはなかった。

屋敷本邸の一室で、春花に向けて報告する有角の言葉を聴くのは、白峰、黒原、左馬ノ介、持国、そして雪絵の面々だ。

有角の調べた話の内容によると、彼ら吽形衆は、“真庭念流を修めた者で獅士堂の武俠を闇討ちとはいえ斬れるほどの男”を洗うところから行ったようである。

「まず辿るに、この郷の東西で念流の道場自体が少数だったので、割と楽な仕事だったですぜ」

有角の手柄を誇るでもない平坦な口調だ。それは彼の特徴に欠ける顔のようだったが、彼は自らの仲間達あつての成果だと常に思っているだけだ。

「まあ、道場があるのが東のシマだったんで、そこは面倒がありました、なに、それはウチらの仕事です」

東西境界線を跨いでの諜報活動。今回の件のように、境界線に隣接する青刃のシマなどには、東の者が少なからず流れ入っているのがそう珍しくない。しかし実際に『向こう』のシマに這入って動き回るのは、対立するシマだけに奥に進む程に危険になるのだと、両陣営の情報屋が心得、注意している。

実際には、武俠が敵方の情報屋を見抜くことは稀なことなのだが、どこから『あれは向こうの人間だ』と伝わるかがわかったものではないのも、彼らの業界のシビアな実情なのだ。それを先の会席の直後から動いていたとはいえ、この短期間で調べ上げたのは、彼らが誇らずとも確かに吽形衆の手柄である。

「いつも手間をかけるな。で、件の流儀で襲ね菊の鐔の刀を持つ男。わかった

第二章 太刀の参

んだな」

白峰が言い、春花が有角に頭を傾げるのを受けて、へい、と答えて続けた。

「道場生や師範などに訊き込んだ結果、真庭念流の門弟で、武俠としての所在がこの数か月で知れない者、そしていわく『襲ね菊』の鐔の刀を持つ者となると、一人くらいしかいませんでした」

「それは？」

と春花が促すと、有角は頷いて言う。

「名を相馬二隴という青年です。素性は姓の通りの家系のようで、四人兄弟の二男坊」

（.....そうまじろうで、マジロウか.....聴き取れなかったのは、現場を視た堅気さんは目端が利くけれど、耳はそれほどでもなかったのかな？）

と春花や雪絵は思う。加えて春花は、

「.....相馬。相馬氏ね.....。胤の字を与っていないところをみると、傍系かしら」

「そのようで」

と、有角と言葉を交わす。

春花と有角が相馬という人物について話をしている横で、雪絵はその内容が全く解らない。

なので、隣に座る左馬ノ介の洋服裾を引っ張って、問うた。

「そうま、というのは有名なの？ 左馬ノ介」

頷いて返す左馬ノ介は、会議の場を乱さないように声を抑えて答えた。

「相馬氏というのは、古く鎌倉の頃よりの武家だそうです。全国にあって、特に東北や総州.....千葉一帯に力を持っていた武士で、歴代はその名に『胤』の字を与っているんですよ」

「.....なるほど。それで、真庭念流というのが彼らの流儀だってこと？」

「彼らの家系が起こした『念流』が続いているの流派ですので、そう憶えておいて間違いないですね」

「ふうん.....ところで左馬ノ介」

と、雪絵が神妙な顔をして義弟の瞳を見つめてきた。

第二章 太刀の参

「？ 何ですか、姉さん」

「かまぐらの頃って、なに？」

そんな二人の遣り取りを、しっかり耳に聞き届けていた一同は、小さく吹き出して雪絵に向き合った。ただ一人、黒原だけは、青刃のシマの地図を睨むことで反応を示さなかったが。そして春花が『鎌倉の頃というのはね……』と娘に説明して教えてやっている様子に、鼻に皺を寄せて聞いていた。

そんな黒原を視て、白峰と有角、加えて持国は互いの顔を見合わせた。この小隊は大丈夫だろうか、と誰もが思っていたのだろう。

「七百年も昔から続いている家系か。強敵だね」

「そこよりもお前は、念流が未知ではないのか？」

そう問うてくる白峰に、雪絵は顔色を変えずに言う。

「道場や他流との稽古の意義はわかったけれど、未知の刀技に対応できないでは生き残れないでしょう。私はそんなのハナから気にしない」

「ほう、それは頼もしいな」

「まあ、俺が概要は教えるんですけどね、昔から一応、いつも」

二人の遣り取りに左馬ノ介が横から口を挟んだ。

「けれど、心して太刀合いなさい、皆ね。有角さん、まだありますか」

「はい、下手人が複数だった点で調べたことを」

集まる視線を視返し、説明をする有角。それによると、闇討ち犯の相馬二瓏以外の足取りは掴めていないこと、どこの組の者か、武俠であるのかどうかも今の所不明瞭だという。

「相馬氏の関係者を調べましたが、どうにもそいつに関わりのあるスジが力を貸している線は薄い感じでさ」

「相馬二瓏の兄弟という訳でもないんだな？」

「へい、^{やっこ}奴さんの兄弟は、一人が武俠として東で所在がはっきりしている以外は、下二人は堅気暮らしをしておりましたし」

「……そうなると、協力者がいる線もあるな」

春花を視て、白峰が嘆息して言う。頷いて応じた春花は一同に考えを述べた。

「けれど、今はそれはおいておきましょう。向こうにも頭数があるなら、一人でも捕えてお話を訊いてみれば何か解るかもしれないしね」

第二章 太刀の参

頷く一同。

自分からは以上だという有角に続いて、左馬ノ介が小さく挙手して口を開いた。

「……実は俺は、有角さんとは別の方面を調べさせてもらっていたんですが、そこからの話です。相馬二瓏が過去に起こした事件を洗って見たんですが、それによると彼は、今年に入ってから堅気を殺めています」

「……………、そう」

その話を聴いた春花の顔色が変わるのを雪絵は視て、その心中を察した。

(相馬という男は、堅気を傷つけた)

(それは、本来この郷の武俠としてあるまじきことのはずだ。それは私も、そうだと話の上で知っている)

(だから春花さんは、きっとその殺された堅気を気の毒に思っているんだろう)

そう雪絵は思っ、ならばそんな武俠は郷を治める者として、しっかりと斬りやっつけなければならぬだろう、と春花に告げようとした。

だが、その春花はこう言った。

「斬られた堅気は憐れだけれど、斬ってしまった武俠が闇討ちをして、尚、隠しとどめをする 『こころ』 とは、どんなモノかしらね。私は彼も憐れに思うわ」

——と。

その言葉に、雪絵は耳を疑った。

これまで郷と組に仇なす輩を 『狩り』 と称して斬り処断してきた、自分達の頭である春花が、斬るべき相手に向けて 『憐れ』 だと言った。それは同情の心を示したということに他ならないのではないのか。組とシマと堅気に対して害為す存在に、頭がそれでよいのか、と雪絵は思う。

——いや、春花の気持ちは解るのだ。

これは “獅士堂の太刀” の精神のひとつ。相手を想う、相手の意を汲み尊重する 『尊意』 の頭れであるのだと。だが、西の総元締めには仇なす武俠の、一体何を見て、『憐れ』 だというのか？

殺された堅気の衆はもとより、武俠、相馬二瓏を憐れむのは一体どういうこ

第二章 太刀の参

ころなのか。

無然とした趣で雪絵はつぶやく。

「.....わからないよ、春花さん。わからない.....。わからないな.....」

眉間に皺を寄せて、口元をへの字にする雪絵は、誰にともなく答えを求めて吐き出す。

「堅気を斬ることをこの郷の武俠は、シマの為に由としないんでしょう。それは堅気の信用と秩序のために必要だって、これまで耳にタコが出来るほどに何度も聞かされたよ。それでそれを犯した武俠がどういう事情か聞討ちをしてきて、それでどうしてそいつに同情することになるの.....？」

そいつのやっている事は滅茶苦茶だよ、と雪絵は言う。そんな彼女を視て、春花は、

「滅茶苦茶でもね、彼には彼の『心』があるのよ、雪絵。あなたは、これから太刀合うことになる侠の、その心を重んじることが出来ないかしら？」と優しく言った。

「まあ待て、春花」

白峰が横から入ってくる。

「雪絵にはわからん事といって、しかしそのままにして、こいつが心にわだかまりを抱えた状態で狩りに加えるのは良くない。少し順を追って説いてやるべきだろう」

その助け舟に、雪絵は春花に拳を立てて礼をして『お願いします』と言った。

「わかったわ。.....もとより雪絵にはその辺をわかってもらうのが、私の隊に加える意味だものね。さて.....」

と、まず左馬ノ介に顔を向けて春花は問う。

「左ノくん、あなたの情報はそれで全部かしら？ まだあるのなら先に済ませましょう」

「はい。.....実は、相馬が斬った堅気について続きがあります。彼はその後、自らの属する組を離れ、行方が知れないとのことですが、その相馬に斬られた堅気の身内が、彼に接触していたようです」

左馬ノ介の話を、雪絵は正座する爪先をもじもじさせて聞いていた。

第二章 太刀の参

「それは青刃のシマで闇討ちが起こり始めた時期と、どうやら重なるようなんです。つまり――」

「つまり相馬一派はともかく、相馬個人として見た場合、今回の一連の兇行は、その身内が原因かもしれんということか？」

言葉を継ぎ、確認を取るように白峰が問う。そしてそれは恐らく、雪絵以外の皆がそうだろうと当たりをつけたことだっただろう。左馬ノ介は頷く。

腕を束ねた有角が、彼もまた確認を繰り返す意でゆっくりと言った。

「まとめると、相馬二隴は春頃に何らかの事情で堅気を斬るに至り、それを彼の身内が怒り、相馬を責めた。それで相馬が闇討ちをしているというのは、その身内の人間は、獅士堂に恨みがある線がありやすね。そこはどうだったんだよ、織田くん」

「はい、そこも調べましたが、どうやらそのようでした。その殺された堅気の身内というのが、ウチへの恨みを口にして東のシマに移っていったというのを、同じ町の人間が知っていました」

「となると、身内を殺した相馬に、この機に恨みを晴らす役を押しつけて、報仇として獅士堂の武俠を襲わせている、といったところか……」

顎をさすりながら白峰が言葉の尻を持った。以上です、と告げる左馬ノ介に、場に座する一同は了解するように頷いた。

これで相馬二隴の抱える事情は、やや推測とはいえ概ねつまびらかになった。ただひとつ、明らかではない点があるとすれば、それは彼が兇行において何故、『隠しとどめ』なる行為をしたのか――その時の彼の気持ちだ。

雪絵も、ここまでの相馬に関する一連の話を取り敢えず聞き終えて、それに理解が及んだ。

――だが、

「……わからない。彼がしているのは、間違いなく獅士堂への不軌というヤツだよ。どんな事情があってもそれは揺るがない……。彼は西の総元締めに仇なすことをして、自分の何が潔白だと言いたいのか？」

困惑を声音に滲ませる雪絵に、春花は静かに微笑んで、

「それを知るのが、私が先に言ったことを理解する前段階かしらね。じゃあ、その話もしましょうか」

第二章 太刀の参

そう話を切り替えた。

「まずそうね、相馬某がどういう人間かは解るかしら……黒原、どうかしら？」

……続く。